

# CENTENARY

2010. 3. 25

第 48 号

兵庫県立加古川西高等学校



文武両道による人格の形成

## 御退職

## 記念号

今春本校を御退職される校長と荒木教諭に、御勇退に際してのお言葉を本号に依頼したところ、快くお引受け下さいました。

### 終業式辞 要約

増尾禮二

私は、小学校から柔道を始めた。高校になって筋力が弱く、強化しても力強くはなれなかった。幸い、身長は大学の2年生まで伸び続けていた。あきらめずトレーニングを続けたおかげで、急に筋肉も付き、自信が持てるくらいになった。

結局、私の肉体の成長は「奥手」であった。「奥手」の対義語は「早生」である。晩熟か早熟かはひとつの個性であって、どちらが有利であるかではない。

要するに自分で、限界を定めず、可能性を追求

する姿勢が大切である。そして成長するには、基礎が大切になってくる。基礎知識・基礎的経験・基礎体力などを身につける時期が高校時代である。目標を持ち、常に前を向いて進む気持ちも持つことが肝要となる。



増尾校長先生

進む過程で、壁や谷底が現れ、立ち止まざるを得ない。その時がスランプで悩む時である。しかし、この時期が成長し始める兆しであり、大きく飛躍できる前段階である。チャンスは向こうからはやってこない。進むからチャンスをつまめることができる。

我が国の鎖国政策は疾うの昔になくなったが、いまだ鎖国的な政策や風土意識が残っている。そして我々は守られている。

しかし、グローバル化が進み、諸外国との熾烈な生存競争が始まっている。自分自身に真の力をつけなければ、生き残れない時代がすでに来ている。自分を奮奮させるのに、「明確な目標」「何かの為に」「危機感を持つ」といったことが有効である。

目標を高く持ち、大きく飛ばたいと思っている自分をシュミレーションしよう。そうすることで夢実現に大きく近づくことができる。

素直で明るく、そして優秀な生徒とともに過ごせたことは幸せであった。皆さんに感謝している。

### 退職雑感

荒木秀康

退職する日が近づくにつれ、職員室にいたるとき、だんだんにいたわりの目を感じようになつてきた。まだまだ現役でもやれると思つているのに「いつまでもお元気だ」などと声をかけられてはそれこそもうおしまいなのである。



荒木先生 ~職員室にて~

せめて生徒にだけはその風に見られたくないと思い、退職についてはあえて秘して語らずに過ぎしてきた。これまで謎の人物として接してきた以上は、年齢も不詳のままにしておきたかったというところもある。ところがどこから漏れたのか、授業を担当している一年生の間ではいつの間にか広く知られることとなってしまった。遂に謎の一角が崩れてしまったわけだが、そのお陰で、生徒とは名残を惜しむ濃密な時間を共有できたとも言える。まあ、あれはあれとしてよかったのかもしれない、と今振り返ってみて思うのである。

**ちょっと一言** 「一期一会」(いちごいちえ)とは、茶道に由来することわざです。「目の前の人とは、今後何度も会うかもしれない。しかし、もしかすると二度と会えないかもしれない。だから今できる最高のおもてなしをしましょう」という意味です。一度きりの出会いであっても、それをご縁として大切にしていきたいものです。平成 20 年 4 月 14 日の第 1 号より、当号までこのコラム欄を担当してきました。拙文が多く失礼しましたが、今回をもちまして小職は、38 年間の高校教職生活から卒業となります。長らくのご愛顧に感謝申し上げます。引き続き「センチナリー」をお願いいたします。(増尾禮二)